

恩師 井上祥平先生の教え

相 田 卓 三

井上祥平先生が去る3月19日に86歳で永眠された。ストイックで孤高、しかし、京都弁風東京言葉をもって人と自然体で接し、門下生は言うまでもなく多くのファンがいた。研究室文化はフラット。幼少期の時代背景からか、あらゆる権威的・高圧的な空気を排除されていた。化学者であると同時に、さまざまなことに深い造詣をおもちの文化人。自然をこよなく愛し、山歩きを楽しまれた。小学校の国語の教科書に採用された『ねんどはなぜやわらかい』というエッセイからわかるように、単純な文章の美しさを大事にしていた。小職は新生「井上研究室」に受入れていただいた最初の大学院生の一人である。縁があり、井上先生が1994年に東京大学を退任されるまでの15年間、先生のもとで研鑽を積み重ねていただいた。

「独創性が大事」先生の基本的な姿勢であった。その姿勢は研究に限らず、生き様そのものにまで及んでいた。また、



1989年6月 Strasbourg にて
(左が井上先生、右は筆者)

長いものに巻かれる状況に陥る可能性を徹底的に排除され、某所から何度も打診があった叙勲の話ですら応じる気配はなかった。

「まあどうぞ」これは研究方針で迷い、相談のために教授室に行った学生に先生がかかる言葉である。執筆中の原稿をそそくさと脇に片付け、どんなときも学生の悩みに向き合うことを最優先にしてください。「へー、ほうほう」といったやりとりの後、「なるほど、で、あなたは どう思われてる？」——これが次のお決まりの言葉だった。自分としてのアイデアを練っておく必要がある。アイデアを説明すると、「私もそう思います。その方向でやってみられたら？」となるが多かった。学生はこのような先生との懇談を通じて腹が決まるが多かった。この不思議な説得力こそが指導者として必須なのだろうと思った。

「行儀の悪い子のしつけ」もう27年も前のことである。今後のことを話しておきたいと、退任される1年前、井上先生は小職を教授室によんだ。「一緒にやろうと誘ってくれる環境で仕事をするのが一番なので、どこかから誘われたら悩まない方がいいですよ」というアドバイス。その後、「ところで私が引退したらどんな研究をやられますか」と尋ねられた。意気揚々と「ビタミンB₁₂の化学を使って世界初のリビングラジカル重合を達成したいです」と答えた小職に対して「ほう、反応制御ですか。制御は新しいものをつくるというよりは、行儀の悪い子のしつけをするようなものですからね。まあ、あなたがお決めになることなので…」という言葉が投げかけられた。それまでの15年間、井上先生と「重合反応の制御」を目標に研究を行ってきた人間として、一瞬耳を疑った。そのまま部屋に戻ったが、その後もすっきりしない

ままだった。先生が退任されたあと、予定どおりそのテーマを開始したが、結果的に米国の研究者に先を越された。ふと「制御は行儀の悪い子のしつけ」という井上先生の言葉を思い出し、最終的に主たる研究を「重合反応の制御」とはまったく異なる方向に変える決断をするに至った。無意識のうちに保守的になり、コンフォートゾーンである類似の分野にとどまろうとする小職に対して「それだけが選択肢じゃないよ」とあえて嫌われ役のアドバイスをしてくださった先生に深く感謝した。先生の一言がなければ、偶然所属した研究室の研究分野を自分がそのまま継承することに疑問を抱くことはなかっただろう。それはたいへん怖いことではないだろうか？

井上祥平先生は、門下生がいくら頑張っても超えられない化学者であった。同時に最高の師匠でもあった。先生との出会いがなければ、小職がアカデミアに奉職することもなかったと思う。思い出は尽きない。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

井上祥平先生 略歴

1933年、京都市生まれ。1952年に京都大学理学部に入學し、翌年工学部に転学部。最難関だった工業化学科に進み、古川淳二先生の研究室で高分子化学に関する卒業研究を行った。(株)倉敷レイヨンに入社したが、1年で大学院生として古川研に戻り、1962年に工学博士を取得。1年間の米国留学を含め、京都大学に助手として計3年間奉職後、京都大学から東京大学に移籍されていた鶴田禎二先生の研究室に講師として招聘され、助教授を経て、1978年に44歳で教授に就任。二酸化炭素からの高分子合成を初めて達成、ポルフィリン錯体の重合開始剤としての利用など高分子化学の分野で数多くの業績を残された。1994年に定年を迎え、その後、東京理科大学にて10年間教鞭をとられた。また、やさしく化学を広めたいとの思いから、『高分子化学——基礎と応用』(東京化学同人)をはじめとした多数の教科書のほか、児童書『かたいものやわらかいもの』(岩波書店)まで執筆された。紫綬褒章(1998年)、東レ科学技術賞(1994年)、日本化学会賞(1990年)などを受賞。